

入学時および大学生活の実態が学生アスリートの学業成績に与える影響

スポーツクラブマネジメントコース

5021A314-9 松本 翔伍

1. 研究背景

文部科学省令和2年度学校基本調査における大学(学部)進学率は、54.4%(前年度比0.7%増)と過去最高を記録した。進学率は、1980年代後半から右肩上がりに上昇し、大学のユニバーサル化に伴い各大学において様々な入試改革が行われた。この代表例が、1989年に公認された、高校まで継続してきた競技の技量をもとに合否を判定する「スポーツ推薦入試」である。東原(2021)は、大学生全体の中で体育会クラブ所属学生(以下、学生アスリートと称する)が占める割合は8~10%と推定している。

近年、文部科学省「大学スポーツの振興に関する検討会議」を皮切りに、UNIVASの立ち上げ、UNIVASによる「運動部学生の学修支援となる単位数めやす」の策定等、学生アスリートの支援に関心が集まりつつあるが、最も重要な学生アスリートの学業成績に関する実態は、明らかになっているとは言い難い。

2. 研究目的

本研究においては、上述の研究背景に基づき、筆者の勤務先であるA大学の所属学生を対象にWeb調査を実施し、(1)入学時の本意／不本意が学生アスリートの学業成績に影響を与えるのか。(2)学生アスリートの学業成績にどのような大学生活の要素が影響を与えるのか。の2点を明らかにすることが目的である。

3. 研究方法

3-1 調査時期・対象と倫理的配慮

本調査は、2021/10/12~10/24の間で、A大学に在籍する全学部生を対象に倫理的な配慮を行ったうえで、Microsoft Formsを用いて実施した。有効回答数は全学生14,511名のうち、12.6%にあたる1,835名(学生アスリート453名、うちスポーツ推薦209名)であった。

3-2 Web調査の質問内容

内容は、「回答者属性」「入学・卒業に関すること」「一週間あたりの学習時間・生活時間」「学習状況」「大学等における“つながり”」「生活・経済状況」の6つの項目で構成している。

3-3 本研究で用いる学業成績

本研究で用いる学業成績は、「1セメスターあたりの平均取得単位数(以下、平均取得単位数と称する)」と「Grade Point Average:成績加重平均値／以下、GPAと称する」であり、いずれも学生の自己申告に基づいている。平均取得単位数の算出方法は、例のとおりである。

【例】7セメ:取得単位数102単位の学生
・102単位÷(7セメー1セメ)=17単位

研究指導教員:間野 義之 教授

3-4 本意／不本意(無本意)入学の定義

本意入学の定義は、表1の全項目において“本意該当”を選択した回答者である。

表1. 本意／不本意(無本意)入学の分類定義

設問項目	選択肢	本意該当
本学受験時点において、本学はどの程度入学したい大学であったかを以下の選択肢から1つ選んでください。	1.第1志望の大学	○
	2.第1志望ではないが入学したい大学	○
	3.あまり入学したくない大学	
	4.全く入学したくない大学	
入学前の学部選択時点において、入学希望学部の有無及び希望学部への入学を以下の選択肢から1つ選んでください。	1.入学を希望する学部があり、希望学部に入學できた	○
	2.入学を希望する学部があったが、希望学部には入学できなかった	
	3.入学を希望する学部はなかった	
入学前の学部選択時点における、最終決定について以下の選択肢から1つ選んでください。	1.自分の意思に基づいて決定した	○
	2.自分と相談相手または大学との合意に基づいて決定した	○
	3.相談相手の意思に基づいて決定した	
	4.大学からの提示に基づいて決定した	
入学前の学部選択時点における、所属学部の教育目標やカリキュラム、学べる内容の理解について以下の選択肢から1つ選んでください。	5.その他	○
	1.理解していた	○
	2.まあまあ理解していた	○
	3.あまり理解していなかった	
	4.理解していなかった	

3-5 研究方法①

本調査は、統計ソフトIBM SPSS Statistics 27を用いて分析し、有意水準を5%と設定した。

表2. 回答者のタイプ分類

タイプ	分類
タイプ1	一般学生:本意入学
タイプ2	一般学生:不本意(無本意)入学
タイプ3	学生アスリート(非スポーツ推薦):本意入学
タイプ4	学生アスリート(非スポーツ推薦):不本意(無本意)入学
タイプ5	学生アスリート(スポーツ推薦):本意入学
タイプ6	学生アスリート(スポーツ推薦):不本意(無本意)入学

初めに、学生アスリートの学業成績の実態把握を目的に、表2のタイプごとの平均取得単位数およびGPAを比較し、有意差の有無についてKruskal-Wallis検定(Steel-Dwass検定)を用いて分析した。次に、タイプ間で生じた差の要素として、「本意」であること、「学生アスリート」であることが影響を与えるかを確認すべく、「平均取得単位数」および「GPA」を従属変数、「学生アスリート(非スポーツ推薦／スポーツ推薦)」、「本意ダミー」の独立変数に、統制変数を加え、重回帰分析を行った。

3-6 研究方法②

初めに、全学生を対象に、平均取得単位数およびGPAに対して、調査項目の各カテゴリーからspearmanの相関係数が有意な変数を抽出した。次に、「一般学生」「学生アスリート(非スポーツ推薦／スポーツ推薦)」のタイプごとに、従属変数である「平均取得単位数」および「GPA」に対して、spearmanの相関係数が有意な変数をそれぞれ抽出し、対話型変数選択法により取捨選択した。その後、RQ1と同じ統制変数を加えて重回帰分析を行った。

4. 研究結果

4-1 研究結果①

学生タイプ別の平均取得単位数およびGPAは表3・4のとおりである。平均取得単位数($p < .001$)および、GPA($p = .000$)のいずれにおい

ても、タイプ間に有意差が認められた。また、学生アスリート(スポーツ推薦)は、一般学生との比較において、平均取得単位数および GPA が有意に低く、学習面で課題を抱える可能性が高いことが示唆された。その後の重回帰分析においては、表5のとおり従属変数に有意な影響を与える変数がそれぞれ明らかとなった。

表3. 学生タイプ間:平均取得単位数の比較(Kruskal-Wallis 検定)

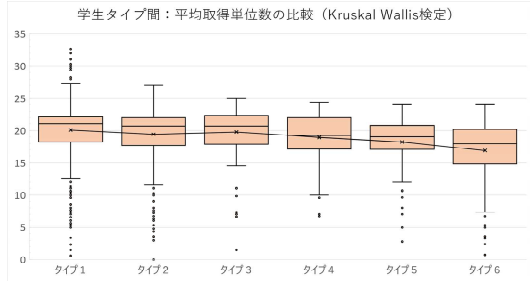


表4. GPA:平均取得単位数の比較(Kruskal-Wallis 検定)

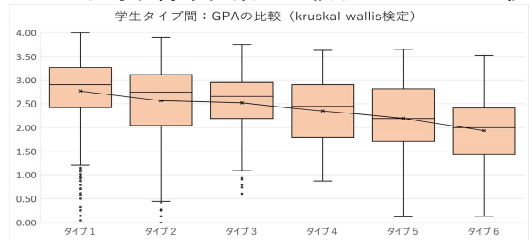


表5. 平均取得単位数／GPA に影響を与える要素

■平均取得単位数	
変数	平均取得単位数 (β)
学生アスリート (スポーツ推薦) ダミー	-1.851***
学生アスリート (非スポーツ推薦) ダミー	-0.229
本意ダミー	0.825***
調整済R2	0.134

■GPA	
変数	GPA (β)
学生アスリート (スポーツ推薦) ダミー	-0.588***
学生アスリート (非スポーツ推薦) ダミー	-0.227***
本意ダミー	0.185***
調整済R2	0.145

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

4-2 研究結果②

タイプごとの平均取得単位数およびGPAに対して、表6・7の変数がそれぞれ影響を与えることが認められた。この結果から、学生アスリートの学業成績には、学習面に関する要素に限り影響を与えることが明らかとなった。

表6. 平均取得単位数に影響を与える要素

■一般学生	
変数	平均取得単位数 (β)
授業や実験に参加する	-0.050**
主体的な学習態度ダミー	1.049***
専門以外の科目に対する興味・関心ダミー	0.724**
専門以外の科目についていけないと感じる	-0.374**
学習 (授業受講等) 満足度	0.444***
【学内】同じ学部の友人	0.269*
【学内】同性の友人	0.247*
1カ月間で自由に使うことができるお金	-0.175**
調整済R2	0.229

■学生アスリート (非スポーツ推薦)	
変数	平均取得単位数 (β)
授業外学習時間 (予習や復習、宿題・課題などを) ダミー	2.012*
専門以外の科目に対する興味・関心ダミー	1.165*
調整済R2	0.177

■学生アスリート (スポーツ推薦)	
変数	平均取得単位数 (β)
専門科目に対する興味・関心ダミー	1.494*
専門科目についていけないと感じる	-1.214**
調整済R2	0.171

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

表7. GPAに影響を与える要素

■一般学生	
変数	GPA (β)
本意ダミー	0.079*
主体的な学習態度ダミー	0.321***
専門科目についていけないと感じる	-0.114***
専門以外の科目に対する興味・関心ダミー	0.089*
専門以外の科目についていけないと感じる	-0.077**
学習 (授業受講等) 満足度	0.065**
学習支援の認知度・利用度	0.075**
【学内】同じ学部の友人	0.073***
調整済R2	0.226

■学生アスリート (非スポーツ推薦)	
変数	GPA (β)
授業や実験に参加する	0.016*
主体的な学習態度ダミー	0.218*
専門科目に対する興味・関心ダミー	0.331*
専門科目についていけないと感じる	-0.160**
調整済R2	0.227

■学生アスリート (スポーツ推薦)	
変数	GPA (β)
主体的な学習態度ダミー	0.280**
専門科目についていけないと感じる	-0.153**
調整済R2	0.238

*** p<.001 **p<.01 *p<.05

5. 考察

5-1 考察①

「学生アスリートの本意／不本意入学は、平均取得単位数および GPA のいずれも有意な影響を与えること」が明らかとなったが、いずれにおいても影響は小さかった。主な要因としては、対象学生を各タイプに細分化する過程で学生数が小さくなったこと、時間の経過とともに直近の学習状況等がより強く影響を与え、本意／不本意(無本意)の影響が弱くなったことが考えられる。しかしながら、上述の結果は、本意／不本意(無本意)と学業成績の直線的な関係に過ぎず、今後は、構造方程式モデリングによる分析等、更なる検証が必要である。

5-2 考察②

一般学生と学生アスリートの比較においては、学業成績に影響を与える要素が大きく異なることが明らかとなった。具体的には、学習面のみならず友人数や経済状況といった複数の要素が、一般学生の学業成績に影響を与えるのに対して、学生アスリートの学業成績には、学習面に限定した影響に留まる点である。主な要因として、学生アスリートは、学習とクラブ活動に非常に多くの時間を費やしているため、学生生活における多様性が見られにくいこと、一般学生は、多様性に富んだ学生生活を送ることで、様々な要素で差が生じたことが推察される。

6. 結論と課題

学生アスリートの学業成績には、科目への興味・関心や学習習慣に関する要素に限り影響を与えるという新たな発見があった。今後、A大学における学生アスリートの支援を検討する際は、学習に重きを置いた支援を行うことが重要である。本研究の限界は、①学業成績が自己申告であること、②平均取得単位数の分析において平均値の差が生じにくいこと、③高校までの学業成績や学習習慣等による影響を考慮する必要があることの3点である。最後に、入試形態に関わらず、学業成績で一般学生を上回る学生アスリートが一定数存在することも、見逃してはいけない事実である。